

古代ユダヤ教の予言とヨーロッパにおける社会変化

竹 島 哲 司

序 論

歴史には、それを動かす必然の力というものが存在するに違いない。その力をどのように認識するかは、歴史に対する見方によって異なるだろう。しかるに一六世紀から二〇世紀にかけてヨーロッパ列強が全世界を席捲したことを思うと、現代の世界を動かしている基本的な力は、ほとんど全て近代のヨーロッパから発していると考えることができる。そこで一つの疑問が生じる。それは、ヨーロッパ列強が歴史的事実として世界の支配的国家となることができたのは一体なぜなのか、またそれはどのような力に基づくものであったのか、ということである。

マックス・ウェーバーはその理由として、唯一ヨーロッパ

においてのみ近代合理主義が成立した、ということを挙げている。そしてヨーロッパでのみ近代合理主義が成立し得たのは、遙かな時を越えて合理的な傾向を有する古代ユダヤ教の予言がヨーロッパの生活様式に影響を及ぼしたからである、と考えた。このことを単純に図式化してみると、古代ユダヤ教の予言の合理的傾向が原始キリスト教に影響し、さらにそれはプロテスタンティズムの倫理へと受け継がれ、その倫理は意図せざる結果として資本主義の精神を生み出し遂にはヨーロッパに近代合理主義をもたらして資本主義社会を発達させることになった、ということになる。このことからわかるようにウェーバーはヨーロッパにおける合理化の過程を歴史を遡って古代ユダヤ教の予言にまで延長した、と言うことができる。

ところで、古代ユダヤ教の予言が合理的な傾向を有しそこ

から近代合理主義が帰結したという論理にはいささか無理がある、と思われるかもしれない。なぜなら一般的に宗教とい

うものは、呪術や魔術などと同様に非科学的・非合理的なものだと考えられているからだ。それゆえ、古代ユダヤ教の予言もまさに合理性とは相対立するもののように見えるかもしれない。ところがウェーバーの主張によると実際はそうではないばかりか、この予言には反呪術的・反儀礼主義的・反神秘主義的な傾向があり、この予言の合理主義的傾向は近代ヨーロッパの生活様式の形成に多大な影響を及ぼすことになるのである。しかしここで一つ注意しておかなければならないのは、ウェーバーは何も古代ユダヤ教の予言が直接的に近代合理主義を生み出したとは考えていないということである。だがこれらのことについてこれ以上述べるのは序論の範囲を逸脱することになるので、詳しくは本論に譲ることとする。

そこでこの卒業研究レポートでは、まず第一章で合理化という用語の定義や宗教社会学的方法論、そしてウェーバーが合理化にこだわる理由について考えてみる。そして第二章と第三章で、ウェーバーのいうように古代ユダヤ教の予言が近代合理主義の成立に影響を与えヨーロッパに社会変化をもたらしたのかどうか、ということについて明らかにしていこうと思う。

第一章 ウェーバーにおける合理性

第一節 「合理化」とは何か

ヨーロッパにおける合理化過程を問題にする前に、ウェーバーがその宗教社会学のなかでたびたび用いている「合理化」や「合理主義」という用語の意味内容を明確化しておくことは、その前提条件として絶対的に必要なことである。それゆえ古代ユダヤ教の考察に入る前にこの問題について触れなければならない。だがそれはウェーバー社会学の中心的概念であって、それを十分に理解するのは非常に困難な作業でもある。したがって、ここでは当面必要と思われる範囲に限って簡単に述べることにする。

ウェーバーがその宗教社会学の中で問題にしているのは明らかにヨーロッパ文化の帯びている独特な「合理主義」のことである。しかしこの合理主義という用語は「きわめてさまざまな意味に解することができる。たとえば、神秘論的瞑想の『合理化』という語法があるが、このばあいには、生の他の諸領域から見ればすぐれて『非合理的』な行動様式を指すものでありながら、しかも経済・技術・学問研究・教育・戦争・司法・行政などの合理化のばあいと同じように、合理化

第二節 宗教社会学的方法論

とよばれるわけである。さらにまた、それら生の諸領域のすべてにおいては、それぞれのさまざまな究極的観点ない目標のもとに『合理化』が進行しうるのであるが、そのばあい、一つの観点からみて『合理的』であることがらが他の観点からみれば『非合理的』であることも可能なのである。それゆえ、合理化と一口に言っても、あらゆる文化圏にわたって、生の領域がさまざまに異なるに依じてきわめて多種多様の合理化が存在したということになるであらう⁽¹⁾。

ところでウェーバーはその著書の中で次のようなことを述べている。「いったい、どのような諸事情の連鎖が存在したために、他ならぬ西洋という地盤において、またそこにおいてのみ、普遍的な意義と妥当性をもつような発展傾向をとる——と少なくともわれわれは考えたい——文化的諸現象が姿を現わすことになったのか⁽²⁾」。これはつまり近代ヨーロッパにおいて政治や経済それに学問や芸術などが合理化の道を辿り、これが今日ヨーロッパ社会を越えて普遍的な意義と妥当性をもつに至ったということを言い表わしているのである。そこで結論的にいえば「普遍的な意義と妥当性をもつ発展傾向」ということが、すなわちウェーバーがその宗教社会学において用いている「合理化⁽³⁾」という用語の意味内容である、ということができるであらう。

『古代ユダヤ教』の訳者・内田芳明氏はその訳者序文で、ウェーバーは合理的宗教倫理を「普遍的価値」として認識したが、そこにウェーバーの全学問的解明の究極的課題が存し、そしてこの課題を解き得る社会科学の方法は必然的に宗教社会学的方法であらざるをえなかった⁽⁴⁾、と述べている。それでは、一体なぜ合理化の解明のためにウェーバーは特に宗教を研究しなければならなかったのか、そのことについて第一節と関連させつつ考えてみることにしよう。

宗教というものは、政治や経済や文化などの「合理性」に対立する「非合理」な性格をもつ。だから宗教の研究が合理化の研究に役立つというのは常識に反するのではないか、と疑問に思うむきがあるかもしれない。確かに宗教行為というのは、他の生活領域からみれば「非合理」である。しかし第一節で引用した文の中でウェーバーも注意しているように「合理」あるいは「非合理」というのは相対的な概念である。したがって一口に「合理化」といってもその内容は様々であり、合理化の中味こそが問題となってくるのである。そしてここでは、ヨーロッパ独特の合理化の独自の特性をとらえるということが重要なのである。

このように考えると宗教生活の研究は必須の仕事になる。なぜならヨーロッパ独自の経済的合理主義は、その成立に際して特定の実践的・合理的な生活態度を取り得るような人間的能力・素質に依存するところが大きかったからであり、そしてその生活態度の形成にとっても重要な要因は、過去においては常に呪術的・宗教的な力であり、それへの信仰に基づく宗教的義務の観念であつたからである。したがって、宗教は、生活態度の合理化という事態を媒介として、経済合理主義成立の前提となるのである。ゆえに合理化の過程を究明するためには、必然的に宗教社会学的方法をとらざるを得ないということが結論されるのである。

第三節 愛国者のウェーバー

次に、ヨーロッパにおける合理化過程を説明することがウェーバーにとつての全学問的課題であつたということの理由を、ウェーバーの個人的信念・信条という観点から明らかにしていこう。

ドイツでは一八四八年に三月革命が起つた。この市民革命において新興市民勢力が、封建的勢力のユンカーと妥協する道を選んだ結果、国家に対立する市民社会は十分に形成さ

れず、ドイツ社会にはユンカーの半封建的な性格が残されることとなつた。また一八七一年のドイツ統一を成し遂げた原動力はユンカーの軍勢力・政治力を中心とした勢力であつた。このような状況下で、ユンカーが軍人・官僚・知識人の供給源となり、またドイツの精神的風土が、ユンカーの特徴であるところのルター主義の家父長精神とプロシア軍国主義の影響を決定的に受けたのは当然の帰結であつたといえよう。そしてこの結果において、ドイツの資本主義には半封建的性格が残されることになつてしまつたのである。

ウェーバーにとつての最も重大な関心事は何よりもまずドイツ帝国の存立ということであつた。なぜなら、国家主義者・排他的愛国主義者という意味ではないが、ウェーバーはナシヨナリストであつたからだ。ところが当時のドイツは、前述のような市民的勢力と中世の遺物のような封建的勢力との対立が災いして、近代合理主義成立の絶対的前提条件となるいわゆる資本主義の精神が、社会的大量現象になるどころか例外的現象たるに留まつている、という状況であつたゆえに、資本主義という点では他のヨーロッパ諸国に比べて遙かに遅れをとつていたのである。これは愛国者たるウェーバーにとつて、もちろん黙っていられるものではなかつた。

そこでウェーバーは一連の宗教社会学上の研究を通じて、

たのである。⁽¹¹⁾

第二章 古代ユダヤ教

第一節 古代イスラエルの神観念および予言者

封建的勢力か市民的勢力か、いずれの勢力に加担するのかという二者択一を、ドイツ社会に対して迫ったのだと考えることができる。ウェーバー自身は当然資本主義の精神を社会的大量現象として、ドイツ社会を封建的性格から脱却させ近代化を積極的に押し進めようとする立場であつたから、ユンカー批判を中心としたドイツ社会批判という極めて実践性の強い主張を行つて、半封建的性格をもつドイツ資本主義を近代資本主義へ純化させようとしたと考えることができる。ウェーバーが『古代ユダヤ教』をはじめとする一連の宗教社会学上の研究によつて、ヨーロッパ固有の合理化の傾向を説明しようとしたのには、このような狙いが一つにはあつたのではないかと思われる。⁽⁸⁾

また別のところで、ウェーバーは合理的資本主義のことを、「近代西洋においてわれわれの生活を支配しつつあるもつとも運命的な力⁽⁹⁾」と名づけており、それは「圧倒的な力をもつて、現在その齒車装置の中に入りこんでくる一切の諸個人——直後に経済的営利にたずさわる人々のみでなく——の生活を決定して⁽¹⁰⁾」いると言っている。したがつて合理的資本主義の運命性と、それと同時に近代のヨーロッパ文化の世界史的に特殊な地位に対して合理的資本主義が有する基本的な意義のために、合理的資本主義はウェーバーの優先的な研究対象となつ

それではいよいよこの第二章から古代ユダヤ教についての考察に入っていくことにしよう。『古代ユダヤ教』におけるウェーバーの問題関心は、どのようにして「一つの高度に合理的な宗教倫理、すなわちあらゆる形態の非合理的な救済探究のみならず魔術（マギー）から解放されている、世俗内的行動の宗教倫理⁽¹²⁾」が古代イスラエルにおいて形成されたのかを明らかにすることにあつた。ウェーバーは、そのような宗教倫理は古代ユダヤ教の予言によつて要求されたのだが、そこには古代イスラエルの神観念の一つの帰結があつたのではないか、と考えた。

神ヤハウェは、あらゆる被造物とは一つの架橋し難い懸隔によつて隔てられた人格的で全能の、宇宙の創造者・宇宙の主であり「おそるべき尊厳をもつた一人の天の王⁽¹³⁾」であつた。そしてこの神には能動的・挑戦的・意志的性質および絶対的超越性と神聖な近寄り難さがあつた。ゆえに「予言者は、じ

ぶんの側から魔術によってヤハウェを強制しようとな、単なる可能性すらも決して計算にいれなかった。そんなことをすれば逆にこの恐るべき神に対する致命的罪惡となるのである⁽¹⁴⁾というように、神意に対して儀礼主義的・呪術的に影響を及ぼそうとするいかなる考えも初めから無効なものとなっていた。さらにまた、予言者はヤハウェとの出合いにおいて自己が「神として崇拜されるとか、神的なものとか合一されるとか、現存在の苦悩や無意味性から自由にされたとか」感ずることは決してなかった。ここで神との合一を求める全ての神秘主義的努力も、救いの道としては排除されたのである。

またヤハウェが近寄り難い恐るべき神であったことから、予言者は彼岸的なものに心を奪われる現世逃避的な神秘家ではありえず、現世の闘争に巻き込まれて神の救済の意図の実行に自ら寄与しなければならなかった。「神が近くにいるということは神的なるものの幸福なる内在というがごときものでは決していないのである。むしろそれは義務と命令なのであり、たいていは駆り立てるような荒れくるった要求なのである⁽¹⁶⁾」。ゆえに予言者は神の誉れのために神の道具として活動することによって信仰を確証しなければならなかったのである。

以上のことから予言者の特徴は、救済の合理的・行動的・現世内的な確証のために、全ての呪術的・魔術的・儀礼主義的・神秘主義的な救済手段をほとんど全く無価値化したことにあるということが出来る。予言者の情熱的な批判は外面的な律法主義に対して向けられていたのであるが、それはこの律法主義が儀礼主義的・礼拝的規則や呪術的純潔さを几帳面に遵守することで満足しようとしていたからである。また神の道具としてヤハウェに奉仕する能動的行為のために全ての神秘主義的所有を排斥することが予言者の神経験の帰結であったのだが、それと同様に全ての神秘主義と、世界と人間運命の意味についての形而上学的思弁もまた排斥したのであった⁽¹⁷⁾。

第二節 ヨーロッパの合理主義と

古代ユダヤ教の予言

ウェーバーのみるところによれば、神秘主義的態度の抑圧と並んで、救済の道としてあらゆる呪術を排除したことが、ヨーロッパの合理主義に対する古代ユダヤ教の予言の意義であった。古代ユダヤ教の予言によって宗教的態度は魔術から解放されたのである。これは、神観念の一つの帰結として予言に反呪術な傾向がおこり、その予言が万人に対して「世俗

のなかで積極的な行為⁽¹⁸⁾」を要求したことの結果なのである。アジアの諸宗教が、古代ユダヤ教と同様の徹底性をもっては魔術からの解放と行為の倫理的合理化の道を歩まず、またアジアの住民大衆が呪術的観念と実践のうちにとらわれていたとすれば、その理由はウェーバーの見解に従えば、アジアに古代ユダヤ教の予言に類する強力な倫理的方向をもった予言が出現しなかったからである。この点についてウェーバーは次のような規則を定式化している。すなわち「呪術を打破し生活態度の合理化を遂行するための手段は、いかなる時代においてもただ一つしかない。偉大なる合理的預言、すなわちこれである」⁽¹⁹⁾。

第三節 古代ユダヤ教の二重性

紀元前五八七年のバビロン捕囚で、ユダヤ教団の指導層がエルサレムを離れたことにより、そこは聖地となって理想化され聖潔な民が住むべきであるとされた。それゆえにそれまでは受け入れられていた人々は徹底的に排斥され、ユダヤ人自らは選民と自覚されるに至り、ここからいわゆる選民思想が生じてきた。そしてこの選民思想が前面に押し出されることによって、いわゆる二重道德がでてきたのであった。⁽²⁰⁾

この二重道德というのは「信仰上の兄弟に対しては厳重に禁止された特定の種類の行為を、非兄弟に対してはどうかでもよいこと」⁽²¹⁾だとするものである。この経済倫理の二元主義のためにユダヤ教には経済的対外活動における倫理的合理主義のために必要な救済論的動機が一切欠如していた。このことがユダヤ人の経済的行動様式を非合理的な営利態度としてしまった。つまり、ユダヤ民族の賤民資本主義は国家掠奪資本主義の諸形式と相似したものであったのだが、そういうことについては倫理的には原理的に考慮する必要がないことだと考えられたのである。そのために、合理的な世俗内的禁欲によって経済的営利というものが宗教的な救いの確証の場所になるといふあのプロテスタンティズムに固有の特殊の思想が生じるということとは、とうていありえなかったのである。⁽²²⁾

ところがそれに対して、一七世紀および一八世紀のキリスト教諸教派、特に洗礼派およびクエーカーは、正直は最上の政略であるという原則に従って、ほかならぬ神なき者との経済的交渉において絶対的な几帳面さを守ることを誇りとしたのである。さらにまた植民資本主義・国家政商的資本主義・国家独占資本主義を排斥したが、これらはプロテスタントにとっては排斥され神に喜ばれない種類の粗野な貨幣蓄積と考えられたからである。⁽²³⁾

以上の結果、プロテスタントの経済倫理からは近代合理的資本主義が生じ、ユダヤ教の経済倫理からは賤民資本主義が生じた。すなわち「ユダヤ人がもっとも長い間もっとも多く住んでいたかの地域、すなわちオリエントや南ヨーロッパや東ヨーロッパにおいては、古代にも中世にも近世においても特殊の傾向を帯びた近代資本主義というものはそもそも発展しなかった⁽²⁴⁾」のである。

第三章 禁欲的プロテスタンティズムと

近代資本主義

第一節 伝統主義の克服

「伝統主義」という用語は、「プロテスタンティズムの倫理」や「資本主義の精神」という用語と相關関係にあり、ウェーバー宗教社会学において重要な役割を果たしている。したがって近代合理的資本主義をもたらした「プロテスタンティズムの倫理」について考察する前に、まず「伝統主義」という用語についての概念規定をしておくこととする。

ウェーバーはその著書で次のようなことをのべている。「人は『生まれながらに』できるだけ多くの貨幣をえようと

願うものではなくて、むしろ單純に生活する、つまり習慣としてきた生活をつづけ、それに必要なものをえることだけを願うにすぎないのである。近代資本主義が人間労働の集約度を高めることによってその『生産性』を引き上げるといふ仕事をはじめたとき、それをこの上もなく頑強に妨害しつつつづけたものは、資本主義以前の経済労働のこうした基調（ライトモティーフ）なのであった⁽²⁵⁾。ここから推測されるように、伝統主義とは、日常の慣例を犯すべからざる行為の規範とみなす精神的態度や信念のことをいい、伝統を伝統であるがゆえに絶対的な価値基準とみなしそれに基づいて行動をするという精神的態度・行動様式のことである。普段は無自覚のまま、ただ伝統にのっとって行動しているにすぎないというのが伝統主義概念の本質的特性である。

ウェーバーは伝統主義的態度の克服を革命とさえ呼んでいるが、この革命はさしあたり経済生活の合理化によって可能になった。だが一体、どのような条件下で人々は伝統主義を捨て、経済生活の合理化に取り組む事になるのだろうか。例えば制度上・組織上の変革は重要であるにしても、それだけでは必ずしも伝統主義を克服することはできない。實際経済形態が資本主義的企業であるからといって、それを運営する精神が資本主義的な精神であるとは限らず、逆にそれと対立

する伝統主義によって運営されることも歴史上しばしば見られたことである。資本主義経済形態と伝統主義とは必ずしも排斥しあうわけではないから、資本主義的経済形態と資本主義の精神は必ず結びつくというような法則的依存関係にあるわけではない。言うならば適合的な関係にたっているのである。

ウェーバーによれば伝統主義の克服が可能になったのは、通常経済的必要からというよりも、むしろ伝統主義とは根本的に異質な新しい精神が侵入したためであった。言い換えれば伝統主義の下で見られたある程度の合理性が単純に量的に拡大していった伝統主義の外枠を打ち破ることになるのではなく、そうしたある程度の合理性を根底的に否定するような全く新しい精神が侵入し、従来の合理性とは異質な合理性を樹立しそれが伝統主義という外枠を突破することになるのである。伝統主義が例外的個人においてだけでなく民衆的規模においても克服されるためには、経済的必要やそれに基づく外的制度面での改革は必要であっても、それだけではまだ十分であり、それと同時に人間の内面に働きかけて内側から揺さぶり動かし、人々を伝統主義との癒着関係から断ち切らせるだけの影響力をもつなにものが必要であった。ウェーバーはプロテスタンティズムの倫理にそれを見出したのである。⁽²⁶⁾

第二節 プロテスタンティズムの倫理

ウェーバーによると、カルヴィニズムの恩恵による選別の教説、つまり予定説では、神によって救われその恩恵を受ける者であるか否かは予め定められている。ところが人間はそれを知ることができず、内面的孤立化に陥る。そこで、個人は自己の救いを確証し神の栄光を増すため、禁欲的生活を営み不断の労働と節約を義務としなければならないと考えられるようになった。言い換えれば、職業の上で使命を達成し成功するために、組織的に絶え間ない自己抑制によって合理的努力を重ね、そして得られたものについてはあくまで儉約を怠らないという禁欲的生活が、神によって救われているという確信に到達するための手段と考えられた。

こうした世俗内の日常生活における合理的禁欲の生活を命じる教義は、禁欲のプロテスタンティズムの諸宗派に共通している。これに反し、カトリシズムにはこの教義がなく、ルター派や敬虔派・メソジスト派の場合でもこの考えが欠けているかまたは不徹底であった。中世カトリックにおいては、世俗内の職業労働ではなく修道院生活の方により高い宗教的価値が認められた。世俗外的禁欲が高く評価されたために世俗内的行為の価値は引き下げられた。

ここでいうプロテスタンティズムの禁欲とは、ヒンドウー教や仏教における禁欲はもとより中世カトリックの修道院における禁欲と比べても異質なものである。東洋の宗教における禁欲は世俗的関心や欲望を捨て世俗から離れるための禁欲であった。プロテスタンティズムにおける禁欲は、世俗内禁欲であり日常生活からの逃避ではなくむしろ日常の職業労働のただなかにあつて、様々な衝動や欲求を断ち切つて、自己の仕事に専念しこれを通じて自己の救いを確信するための自己抑制の方法であつた。

この方法を土台とする経済生活の原理を、ウェーバーは経済的合理主義とよんでいる。それは仮借なく合理的で機械のように能率的であり、自己に対しても他人に対しても冷酷ですらあり得るような行動原則である。しかもこれに基づく行動原則を守ることによって初めて人々は神の道具になりきり、神から課せられた使命の達成に従事しうることになるのである。企業家のあくなき営利追求や、能率を上げるためにする労働者の非人間的扱いも、実はこうした禁欲的合理的職業専念のエートスのあらわれであり、この意味でこうした行動は神の栄光を増すためにする正しい行動として人間の使命として評価され得ることになる。

プロテスタンティズムの倫理の影響によって合理的な生活

態度が形成され、その教義はヨーロッパにおいて近代資本主義の精神的支柱の基礎となつた。ただしこの場合、もとより禁欲的プロテスタンティズムの倫理がそのまま近代資本主義の精神的支柱となつたというのではないし、またその教義が営利の追求を奨励する傾向を持っていたので、資本主義的精神の形成に寄与したなどとしているわけでもない。それどころか実際には禁欲的プロテスタンティズムの諸宗派が教えたところは一般的に反営利主義的であり、人間本来の営利衝動をむしろ抑圧する方向をとっている。それ故これらの諸宗派の伝導者のなかにも、資本主義の精神を直接喚起しようと試みた人は一人もいなかった。

それにもかかわらず、いかなる被造物の權威をも認めず伝統の神聖さを無視し自己が絶対と信ずる価値に従つて生き抜いたプロテスタントの行為が、伝統主義を打破し合理化への道を切り開いたのである。禁欲的プロテスタンティズムの倫理は、一方では非合理的な営利活動を抑圧しながら、他方では人々をその職業活動への合理的献身にかりたて、これによつて彼らに成功と富をもたらした。そこに、より強力で執拗な合理的営利追求の生活態度が発生するに至つたのである。

富の誘惑下の世俗化的影響に対してピューリタンの世俗内的禁欲は抵抗することができなかった。元来、神の尊嚴を讃

えるという、より高い目的のための単なる手段であるべき絶え間ない禁欲的な営利と労働が、今や目的そのものになった。経済は宗教的拘束から解放され成立当初の精神的推進力を離れて前進し、近代資本主義が動き出すに至ったのである。

結 論

古代ユダヤ教の予言を起点とし禁欲的プロテスタンティズムを終結点とする宗教史的脱魔術化の系譜、つまり合理化の過程の絶大なる意義をウェーバーは強調している。「現世を魔術から解放するという宗教史上のあの偉大な過程、すなわち古代ユダヤの預言者とともににはじまり、ギリシヤの科学的思惟と結合しつつ、救いのためのあらゆる呪術的方法を迷信とし邪惡として排斥したあの魔術からの解放の過程は、ここ（禁欲的プロテスタンティズム——引用者）に完結をみたのである」²⁷⁾。

このことから、ヨーロッパにおける現世内的行為の合理的倫理を古代ユダヤ教の予言が創出したという意義が認められるのである。ところがそれにもかかわらずウェーバーのみるところによれば、合理的な資本主義の精神と近代産業資本主義は、結局やはりユダヤ人ではなくまず第一にピューリタン

を起源とするものであったのである。というのは、古代ユダヤ教の宗教倫理は近代ヨーロッパの経済倫理にまで強大な影響を及ぼした合理的なものであったが、その宗教倫理から帰結される経済倫理はその賤民的特質ゆえの賤民資本主義だったのである。要するに古代ユダヤ教には、近代ヨーロッパの

合理的経済倫理の形成に対して相矛盾する二つの契機が、つまり賤民資本主義の形成という阻止的・対立的契機と、近代的経済エートスとその合理主義の形成という創造的・促進的契機とが、根源的・徹底的性格として存在していたのである²⁸⁾。

古代ユダヤ教はこのように二重の様相を呈しており、一方で儀礼主義的な律法に対する敬虔さが発展し、その一方で予言および独自の神觀念に密接に関連した高度に合理的な世俗内的行動の宗教倫理が成立したのである。そしてこの宗教倫理こそが、ヨーロッパの宗教的な方向づけに基本的な影響を及ぼし、間接的にはヨーロッパの世俗的な進歩的活動主義の端緒となったのである。すなわち、宗教的脱魔術化の過程の始点である古代ユダヤ教の予言は、その合理的宗教倫理を禁欲的プロテスタンティズムへと譲り渡し、あらゆる呪術的な救済手段を徹底的に排斥し、魔術から解放され現世に対して積極的な近代ヨーロッパの合理的な生活様式²⁹⁾に対して影響を及ぼしたということができるのである。

- (1) マックス・ウェーバー『宗教社会学論選』みずず書房。
一九七二年 二二頁以下。
- (2) ウェーバー 前掲書 五頁。
- (3) 金子武蔵編『マックス・ウェーバー』以文社 一九七六年 一二四頁を参照。
- (4) ウェーバー『古代ユダヤ教』みずず書房 一九八五年訳者序文三頁を参照。
- (5) ウェーバー 前掲書 一九七二年 二三頁を参照。
- (6) 金子武蔵編 前掲書 一二五頁を参照。
- (7) ユンカーとはプロシア社会の中核となった土地貴族のことである。隷属的農業労働者を使用して直接経営を行う一種の大農業資本家で、長男が家を継ぎ二・三男は官吏や将校となってプロシアの支配階級を形成した。
- (8) 安藤英治編『ウェーバー プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』有斐閣新書 一九七七年 五〇二〇頁を参照。
- (9) ウェーバー 前掲書 一九七二年 九頁。
- (10) ウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神 下巻』岩波文庫 一九六二年 二四五頁。
- (11) G・アブラモフスキー『マックス・ウェーバー入門』創文社 一九八三年 一四頁を参照。
- (12) ウェーバー 前掲書 一九八五年 六頁。
- (13) ウェーバー 前掲書 四八二頁。
- (14) ウェーバー 前掲書 四六三頁。
- (15) ウェーバー 前掲書 四八四頁。

参考文献

- (16) ウェーバー 前掲書 四八三頁。
 - (17) アブラモフスキー 前掲書 七五〇頁を参照。
 - (18) ウェーバー『儒教と道教』創文社 一九七一年 四四六頁。
 - (19) ウェーバー『一般社会経済史要論 下巻』岩波書店 一九五五年 二四八頁。
 - (20) 内田芳明『マックスヴェーバーと古代史研究』岩波書店 一九七〇年 二二三―二四頁を参照。
 - (21) ウェーバー 前掲書 一九八五年 五二五頁。
 - (22) ウェーバー 前掲書 五二六―五二八頁を参照。
 - (23) ウェーバー 前掲書 五二七頁を参照。
 - (24) ウェーバー 前掲書 五二九頁。
 - (25) ウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神 上巻』岩波文庫 一九五五年 六五頁。
 - (26) 安藤英治編 前掲書 六六―七六頁を参照。
 - (27) ウェーバー 前掲書 一九六二年 二六―二七頁。
 - (28) 内田芳明 前掲書 一六〇頁を参照。
 - (29) アブラモフスキー 前掲書 七四―七五頁を参照。
- マックス・ウェーバー『宗教社会学論選』みずず書房 一八七二年。
- 金子武蔵編『マックス・ウェーバー』以文社 一九七六年。
- ウェーバー『古代ユダヤ教』みずず書房 一九九五年。
- 安藤英治編『ウェーバー プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』有斐閣新書 一九七七年。

ウェーバー 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』

岩波文庫 上巻一九五五年・下巻一九六二年。

G・アブラモフスキー 『マックス・ウェーバー入門』、創文社
一九八三年。

ウェーバー 『儒教と道教』、創文社 一九七二年。

ウェーバー 『一般社会経済史要論 下巻』、岩波書店、一九五
五年。

内田芳明 『マックスヴェーバーと古代史研究』、岩波書店、一
九七〇年。

(社会学科) 四回生